

二〇一四年四月三〇日(乙訓寺参加者一名)

白牡丹一ひら拾ひ栞とす	わかば
木の香むす水上橋に春惜しむ	"
山門の一步に満つる牡丹の香	"
ぼうたんの香に誘はれ庭巡る	"
雨の珠溜めて煌く日の牡丹	宏 虎
白牡丹無垢を極めて一穢なし	"
山門を凌ぐ大樹の樟若葉	"
雨に克ちなお崩れずに白牡丹	小 袖
青銅の宝珠を囲む寺若葉	"
葉隠れに青梅育つしじまかな	"
山門をくぐるや否や牡丹の香	きづな
空の香の水上橋に風光る	"
青梅のたわわに実る御神木	"
山裾に金色映ゆは竹の秋	有 香
千本の牡丹に佇つ大師像	"
乙訓の水が育てし牡丹かな	よし子
水亭や少し開かれ春障子	"
春光に巡る境内古祠多し	ひかり

雨憎し崩御寸前白牡丹	ぼんこ
つつじ燃ゆ末社へ小さき橋渡る	つくし
昨夜雨をふふみて牡丹うなだるる	満 天
傘高く翳す大輪白牡丹	"
水上橋行きつ戻りつ春惜しむ	"
観世音菩薩に通ふ若葉風	"
皆めくつつじ背にしてVサイン	"

吟行会会みの選

二〇一四年四月三〇日(乙訓寺参加者一名)